

## 個人状況(X篇) 論の展開に向けて : その見取り 図の提示

著者	水野 節夫
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	63
号	3
ページ	79-107
発行年	2016-12
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021227">http://doi.org/10.15002/00021227</a>

## 〈個人状況（X篇）〉論の展開に向けて

——その見取り図の提示——

水野 節夫

### ・1 はじめに

2000年に発表した『事例分析への挑戦——‘個人’現象への事例媒介的アプローチの試み——』以降、ぼくなりには思索を積み重ねてきているつもりでいるので、かなり前から、ということになりますが、ぼくが自分の中心的研究プロジェクトとして考えているものに〈個人状況（X篇）〉論と呼びならわしているものがあります。この言い方でどういう議論を提示・提起したいのか、という点については、後ほどこの研究ノートでも披露するつもりでいますが、方法論的・理論的にいくつか越えておかななくてはならないハードルがあって、まだその全貌を提示するところまでまではできないでいます。

とはいえ、この間この議論を立ち上げていくために、個別的（＝‘アイディア・ノート’的）にはいくつも仕込み作業用のメモを準備しており——それらの作業の成果＝蓄積効果と言っていいと思うのですが——つい最近、この研究プロジェクトの全体的＝包括的イメージについての見通しがそれなりにできあがりつつあることも事実です。

こうした研究局面にあるので、この研究ノートでは〈個人状況（X篇）〉論へと踏み出していくために必要だと考えているいくつかの議論を覚え書き風書きとめておくということをやっておこうと思います。より具体的には、

- [1] このテーマへの思い入れ；
- [2] 〈個人状況〉を始めとした研究対象に接近する際の）方法上の基本原則とその精緻化の見通し；
- [3] 〈個人状況（X篇）〉論の各論的展開のイメージ定着に関わるいくつかのポイント；
- [4] 今後取り組んでいきたい主要な課題群；

について、現時点で自分なりにわかっていること、自覚していることを文章として定着させておくことがここでの課題です<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 以下の文章は、あくまでぼく自身の研究の現局面についての見通しを提示したり仮説的アイディアを定着させたりしようとしているという意味で、ぼく自身が研究プログラムを推し進めていくための里程碑もしくは見取り図を提示することを目的としているものです。言い換えると、ここでは〈個人状況（X篇）〉に関わる具体的論点に関して何か論証しようとしたり、具体的事例を相手にしてこれを分析しよう

なぜ、そういうことをするのか、と言えば、これから当分の間、この〈個人状況（X篇）〉論という包括的研究プロジェクトの一環として位置づけることができる個別検討テーマ群（上記の〔4〕で挙げてくることになる課題群のことです）について、一連の個別論文や書籍という形での発表を考えているのですが、ぼくの研究ペースや研究スタイルを考えると、各々の研究テーマについての成果が出てくるのには相当時間がかかってしまいそうに思うので、この際、〈〈個人状況（X篇）〉論の展開に向けて——その見取り図の提示——〉という形で、ぼく自身の研究プロジェクト全体の中でのそれら各論的議論群のおおよその位置づけをあらかじめ行なっておいた方がいいのではないかと考えるからです。

## ・2 なぜ〈個人状況〉論なのか

‘個人’現象にスポットをあててみたいという気持ちがぼくにはあるわけですが<sup>2</sup>、なぜそういうことをしたいのでしょうか。ぼくなり思い入れの理由として、ここでは次の4つの議論を挙げておくことにします。それらは、〔い〕人生に対する〈基本姿勢〉論、〔ろ〕〈‘その人らしさ’の核〉論、〔は〕〈個人的な人生のキャリア（personal life career）〉論、〔に〕〈体験効果〉論の4つで、すぐ後に見るように、これらのテーマ・問題意識は相互に関連し合っているものです。

### 〔い〕人生に対する〈基本姿勢〉論

先ず第1は、魅力的な生き方をしている人の人生との向き合い方、言わば人生に対する〈基本姿勢〉とでも言えるものに対する興味関心です。世の中にははすごく魅力的な〈基本姿勢〉が様々な生活場面で‘発現’＝現れてきていると判断できる人々がいます。その魅力を掴まえることができないだろうか、あるいは、そうした魅力と、その総体としての人生に対する〈基本姿勢〉を掴めるような仕事・研究がしたいという思いをぼくは持っています。‘個人’現象論の一環として、この〈基本姿勢〉絡みでの、もしくは、〈基本姿勢〉そのものに焦点化した議論・研究のようなものを探ることができないだろうか、ということです。別の言い方をすれば、どのような取り扱い方をすれば〈基本姿勢〉論のようなものを主題化できるのかについて考えをめぐらせてみたい、と言ってもいいでしょう。

ただし、人生に対する〈基本姿勢〉を把握すると言ってもストレートにそうしたいわけではありません。と言いますか、そういったことは難しいのではないかと考えています。ぼくがやってみたいのは、その人らしい‘生き方’や‘生かされ方’の諸特徴、諸類型——こうしたこと自体は、経

---

としているわけではなく、また例えば具体的論客のキー・テキストを研究対象として設定しその論客の主張や議論の批判的検討を狙いとしたりするものでもありません。要するに、ここで書き連ねていることはあくまで〈研究ノート〉なのだということをお断りしておきたいと思います。

<sup>2</sup> 『事例分析への挑戦』の「序論」（水野〔2000：pp.3-25〕）を参照のこと。

験的次元で主題化可能なテーマとして設定できるはずだと考えていますが——にスポットを当てながら、同時に（あるいは、そうした作業を踏まえた上で）、様々な意味と形で、魅力的な〈基本姿勢〉を析出・提示・例示してくる、というようなことです。さらに言えば、色々な生活場面に多様な形で現われてくる魅力的な姿を紹介・提示することを通して、結果的に、あるいは蓄積効果的に、言わば‘立ち上がってくる何か’——人生に対する〈基本姿勢〉とでも呼べるもの——を浮かび上がらせてくるようにすることができればいいのだが、という思いを持っています。

### 〔ろ〕〈‘その人らしさ’の核〉論

第2は、〈‘その人らしさ’の核〉とでも呼べるものへの興味関心です<sup>3</sup>。ぼくが注目したい議論の中心にあるのは、ある個人の生き方の核になるような‘何か’——つまり、ある個人においてその‘何か’があれば、その‘何か’を中心にして色々なものがまとわりついてくる・結晶化してくることになるはずの‘何か’——で、その‘何か’をより鮮明にするために必要なはずのトピック群を検討していこうというものです<sup>4</sup>。そのポイントは、〈その人の核になるような‘何か’〉の探

<sup>3</sup> どういう経緯で、このテーマにたどりついたのでしょうか。‘個人状況’論的興味関心自体は、ずっと以前から持っていたわけですが、〈‘その人らしさ’の核〉とでも呼べるものへの興味関心をより強く意識する直接的きっかけの一つとしては、〈現代世界〉論と呼びならわして気にかけて取り組んでいるテーマ群への興味関心の一環として、**Morris Berman, 2006, *Dark Ages America*, W.W. Norton & Company**のとりわけ“1 **Liquid Modernity**”への目通しをしている過程で、‘アンチ・アメリカのスタンス’（より正確には、アンチ・‘市場ファンダメンタリズム’の基本姿勢）を採用することが何とでも必要だな、という思いを抱かされたことが関係しています。そのポイントを一言で言えば、‘市場ファンダメンタリズム’的発想や論理が蔓延する世界で生き永らえていると、傾向的に言って、‘個人状況’次元で、その人の核になるかもしれない大切な‘何か’が擦り切れていかざるを得ないような事態が進行していく危険性がある、そうした危険性を回避するためには、一方で、そのような事態に歯止めをかけることができるような社会的仕組みや事情の検討と主題化が、他方では、〈‘その人らしさ’の核〉の生成・維持・強化などに関わる諸事情の検討と主題化が、重要な研究課題・思索課題なのではないだろうか、という思いを、今さらながら強く持つことになったということです。

<sup>4</sup> ここで注意を促しておきたいのは、次の4点です。

第1点は、‘個人状況’論展開の際の重要な戦略的着目点として、〈‘その人らしさ’の核〉といった発想自体を高く評価しているということ。

第2点は、価値評価的に言えば、〈‘その人らしさ’の核〉の存在が見られること自体が常にプラスのものという具合には考えていないということです。もちろん、〔い〕の人生に対する〈基本姿勢〉論での論調は価値評価的にモデルの人物を対象にしていますので、その議論の延長線上で〈‘その人らしさ’の核〉という事象が主題化されてくる場合には、基本的にプラスの価値評価をして構わないのではないかとは思っていますが、〈‘その人らしさ’の核〉論自体に即して言えば、〈‘その人らしさ’の核〉そのものは価値評価的にはプラスにもマイナスにもなりうるものであり、さらに言えば、非常に両義的になる場合も、大いにありうると考えているということです。

第3点は、〈‘その人らしさ’の核〉の経験的特定化について今のところ自信があるわけではないということです。もちろん、〈‘その人らしさ’の核〉といったものを想定すること自体は可能だと思っていますが、そうしたものをどのような抽象水準で特定化できることになるのか、とか、〈‘その人らしさ’の核〉

求・解明という形で暫定的な定式化をしているものであり、〈‘その人らしさ’の核〉とでも言えるものに関連したテーマ群です<sup>5</sup>。

---

といった事象が、それ自体どの程度経験的検証に耐えるものか、という点に関して、現時点では見通しが立っているわけではないということです。

ただし、第1点として触れておいたように、ぼく自身としては〈‘その人らしさ’の核〉という事象自体は、非常に強い興味関心を持って究明・探求していきたい‘研究の焦点’的着目点であることは確かです。

第4点目としては、ぼくはここで、〈‘その人らしさ’の核〉のようなものが常に存在しているといった具合に考えているわけではないということです。〈‘その人らしさ’の核〉といった事象は、ある種の複合的条件が整った場合に状況的に生成してくることがあるのではないかと、といったイメージを持っています。さらに言えば、〈‘その人らしさ’の核〉は、対象とする個人が置かれた状況の中で、その人物の来歴、とりわけ‘内的生活史’的諸事情の複合的諸帰結や蓄積効果の影響下において諸条件が整いさえすれば、生起してくることがあるものではないかと、仮説的に考えています。

<sup>5</sup> ここで、〈‘その人らしさ’の核〉とでも言えるものとあいまいに表現している点をもう少しだけ分節化＝腑分けしておくことにします。ぼくは、言ってしまうと、多様な素材や事例群を使って様々な角度から‘その人らしさ’の【生成・形成・維持・変容・消滅・再生】といった主題群を論じていきたいと考えているのですが、そうした議論をしていく際のキー・ワードとして、《〈[イ]核・基盤〉；〈[ロ]拠点〉；〈[ハ]準拠点・参照点・比較点・対照点〉》などを留意すべき着目点として設定できるのではないかと、というイメージを持っています。

〈[イ]核・基盤〉というのは、〈‘その人らしさ’の核〉になるような‘何か’、あるいはそれと同じではありませんが、‘その人らしさ’の基盤(＝ベース)のことです。

次に〈[ロ]拠点〉とは、[イ]とは別に、あるいは、[イ]の核や基盤の存在を論理的に前提した上で、それらの上にあるというイメージで考えているものです。ある人にその人らしさの‘拠点’なり‘拠点候補’なり、あるいは‘拠点の萌芽’があった・できた、として、(その周りに)‘その人らしさ’の特徴がまわりついていく方向性が見出される場合を想定しようと考えているのですが、〈‘その人らしさ’の拠点〉という言い方で興味を持っているのは、そうした、‘その人らしさ’を(再)確認していったり、確かなものにしていったりする際の‘アンカー(＝錨)’もしくは‘拠点’になりうるものへの関心、と言ったらいでしょうか。

そして、[イ]や[ロ]とは別に、あるいは、[イ]や[ロ]を事実上もしくは結果的に強化したり、その逆に弱めていく際の媒介的位置、あるいは維持・変容させていく際の媒介的位置を占めるのが、〈[ハ]準拠点・参照点・比較点・対照点〉という具合になります。

[イ]と[ロ]とを分析的に区別することが妥当なのかどうか、は、現時点ではよくわからないでいます。と言うのも、ぼくが最初に思いついてきたのが、実は[ロ]だからです。ある人がその人生途上で‘何か・誰か’などと格闘する中から結果的・偶然的に生み出されてくる本人的契機——しかも、〈本人にとって大切なもの〉——と出会ったり、そうしたものを発見、再発見するという事態がありうるということ、そしてそうして気づいた〈本人にとって大切なもの〉が、その人のその後の人生のあり方の重要な支えになるという意味で‘拠点’的機能を果たすことがあるという経験的事実を踏まえて、その人らしさの‘拠点’というものに注目しているからです。[イ]の‘核’や‘基盤’は、‘拠点’ということを使うのであれば、そういうものを想定しておかないと、論理的にまずいのではないかと、といった思い＝思索結果から、後から入れ込んできているものなのです。

いずれにしても、[イ][ロ]と[ハ]とは、区別できると思います。なぜなら、ある人が[イ]や[ロ]

ここで、ある個人の人生に見出される重要な事態の〈主観的シグマ (=  $\Sigma$ )〉への興味関心に触れておくことにします。自分でも不思議に思っていたことなのですが、ぼくの場合、個人生活史(研究)への関心<sup>6</sup>と言いながら、ある個人の(細かい事情も含めての)生活史の全体に関心が向かっていたわけではないのです。ぼくにとっては、事実次元でのいわば‘人生の軌跡 (life trajectory)’のようなものは、対象となる人物の‘その人らしさ’に迫っていく際には確かに参考になるし、背景情報としては欠かせないものではあるけれども、しかしそうしたこと自体がぼくの興味の中心にあったわけではない。そうではなくて、そうした‘人生の軌跡’を生きているその人が、本人の主観的世界の中で、本人の観点から見て様々な意味で重要に思われる事態(事件・出来事・出会い等など)と(その時点その時点での)それらの事態の〈主観的シグマ (=  $\Sigma$ )〉——つまり、ある時点で(本人の主観的次元で呼び覚まされてくる)‘大切な事態群の(その時点での)集合’のこと。違う時点になると別の形でのシグマ化が生起しうる、という意味で、本来的に‘状況依存的’と言える性格を持っている、という具合にぼくは考えています——とでも呼べるものこそ興味があったということに改めて気づく(思いがいたる)のです。ぼくの感触では、この《大切な事態の〈主観的シグマ〉》が問題となる時には、‘その人らしさ’の核にまつわる‘何か’が凝縮された形で主題化され注目を浴びることになるはずだ、といった思いがあるのかもしれませんが。別の言い方をすれば、どうすれば、こうした凝縮化された形での大切な事態が創り出されてくる、

---

を構築・維持・変容させていく過程において、いわば‘他者的な位置・機能’を占めるものが〔ハ〕のはずだからです。

なお、‘その人らしさ’の‘核萌芽’論や‘拠点萌芽’論の展開にあたっては、最低限、本人次元・主体次元と社会次元・制度次元の双方についての目配りをする必要があるという点に触れておきたいと思います。‘その人らしさ’論を単なる‘主体性’論(これはこれでやるつもりですし重要なものですが)だけに終わらせるのではなく、制度論や社会構造論、さらには(非常に難しいことですが、もし可能なら)〈現代世界〉論との関わりを視野に入れたものにしておきたいからです。

ここで〈個人状況〉論と〈現代世界〉論との関わりについて一言触れておきましょう。この研究ノートではマイクロ水準に焦点化した形で〈個人状況〉論を主題的に論じようとしているわけですが、ぼくにはそうした興味関心とは別のところでマクロ水準、もしくは超マクロ水準に焦点化した形で展開することが要求される〈現代世界〉論に対して非常に強い理論的・観察的興味関心があります。この二つの議論は、焦点となる理論水準とそこで焦点化される主要な主題群が異なるのと、各々の関連事象には一定程度自律的な動きや傾向が見られる事情もあって、ぼくの場合、言わば二つの部分理論 (partial theories) として、現在までのところまったく別々の形と水準での理論的検討が併存している状態となっています。〈個人状況〉の把握にまつわる諸現象の諸特徴の析出というマイクロ水準に焦点化して展開されていくマイクロ理論と〈現代世界〉の全体的・傾向的な諸特徴の析出というマクロ水準に焦点化して展開されていくマクロ理論という性格の違いから、ぼくの中ではそうした併存状態はこれからも続くことにはないか、と予想しています。このように両者の理論的関連については見通しが立っているとは言い難い現状にあるわけですが、にもかかわらず、両者の間には、おそらくは‘多段的間接性’とでも呼べるような‘ゆるやかな結びつき’を特徴とする‘前景・背景’関係を想定することができるかもしれない、といった仮説的着想も含めて、両者の理論的関連づけの模索の必要性を感じています。

<sup>6</sup> さしあたり、水野〔1986 ; 2011a〕を参照のこと。

まさにそのプロセス——凝縮化された形で発現してくる大切な事態の進行が、‘その人らしさ’の核にまつわる‘何か’の総体的構図（configuration）を創り出してくるプロセスそのもの——を主題化することができるのか、という点に対して強い興味関心を持っているということです。

### 〔は〕〈個人的な人生のキャリア（personal life career）〉論

第3は、ある人物の〈個人的な人生のキャリア〉とでも呼べるものへの興味関心です。

〈個人的な人生のキャリア〉とは何か。それは、ある個人がたどる人生の軌跡、ある人が意識的もしくは結果的に歩むことになる人生上の経歴＝キャリアのことです。ここでは、〔a〕《個人的な》と〔b〕《人生》と〔c〕《キャリア》の3つのパーツに分けて、ぼくがどういったことに興味関心を持っているのかという点について説明をしていくことにしましょう。

まず〔a〕の《個人的な》に注目するのは、ある具体的な個人に即してみていきたいと考えているからです。〈個人的なもの（the personal）〉に対する関心、もしくは個人生活史研究という場合の‘個人’にあたる場所にぼくの興味関心があると言ってもいいでしょう<sup>7</sup>。次に〔b〕《人生》と言っているのは、ここでの焦点が、対象とする人物にとって重要な意味を帯びている‘人生’の側面——すぐ前のセクションで用いた表現を使って言えば、対象とする人物にとっての、言わば《大切な事態の〈主観的シグマ〉》に代表もしくは象徴される形で照らし出されてくるはずの‘人生’的側面——に置かれているという意味です。最後に〔c〕《キャリア》となっているのは、人生のその時点、その時点に対して、というよりも（そうした人生の断片的なものにもスポットを当てることは当てるのですが）、人生の歩みを進め様々な生活体験や人生体験を積む中で否応なくその人の中に言わば‘刻み込まれていく’もの、人生体験上の‘蓄積効果’的な側面、持続的な側面に、より強い関心をぼくが持っているからです。

ここで‘人生のキャリア’と言っているのは、ぼくの主要な関心が、ある人の‘職業的キャリア’などがどうなっているか、といった点にあるわけではない、ということをはっきりさせるために用いているものです（‘職業的キャリア’がその人の‘人生のキャリア’の主要な部分を占めることになったり、‘人生のキャリア’の主要方向のありように対して影響を与えるということ、しかも時に決定的な影響を与えるということは、もちろん大いにありうることです）。ここで念頭に置いているのは、ぼく自身が‘生活・生き方・生かされ方’論という言い方でもって考えていきたいと思ってきていた内容で主題化しようと考えていたことでもあります。

### 〔に〕〈体験効果〉論

〈個人的な人生のキャリア〉論とも事実上関連してくるところがあるのですが、そうした関心を離れてもそれ自体として興味深い事象として注目したいと考えている議論に〈体験効果〉論があります。これが第4の興味関心です。

---

<sup>7</sup> 水野〔2011a〕を参照されたい。

ある個人は、その人の‘人生行路’を歩いていく中で、（ぼくが言うところの‘体験群3’<sup>8</sup>、つまり、「ある個人の生活もしくは人生において非常に大きな重みを持つ…ことが明らかな体験群、…“特権的”体験群」（水野〔2000：p.62〕）に属する）さまざまな〈生活体験〉に出くわすことになり、そのいくつかのものは、その個人に対してプラス・マイナスの‘痕跡’のようなものを創り出すことがあります。そうした‘痕跡’が生み出された場合、そこに〈体験効果〉があった、ということができるでしょう。

‘痕跡’ということで念頭に置いているのは、一方で、‘トラウマ’現象といったマイナス方向での動きであり、他方では、（そうした‘痕跡’が生み出すマイナス体験を教訓にする形でプラスの方向へと変換する場合も含めて）プラスの〈体験効果〉として受けとめていく方向で浮かび上がってくる現象です。

ここで注目したいのは、この〈体験効果〉とその多様な諸帰結です。つまり、考えてみたいのは、〈体験効果〉として（一応）‘痕跡’が創り出されたとした上で、その‘痕跡’がその後どういう展開・変貌・軌跡などを描くことになるのか、またそうしたプロセスの展開にはどういった契機・事情などが関わってくるのかといった点の主題化です。

こうした性質を持った〈体験効果〉の中のいくつかは、（先に〈‘その人らしさ’の核〉論の注の個所で触れた）‘その人らしさ’の‘核’なり‘拠点’となっていく可能性を持っているのではないかと、とぼくは考えています。そうした可能性のあるものを、上では（その人らしさの）‘核萌芽’と‘拠点萌芽’と呼んでいたのです。

‘その人らしさ’の‘核’なり‘拠点’はどのようにしてできてくるのか。この点については色々な回路やプロセスが考えられるはずで、その論理的可能性と経験的可能性を探るとというのが、〈体験効果〉論の課題の一つとなるでしょう。

その回路の1つとしては、例えばある体験をした結果、その人の‘拠点萌芽’ができ、さらにそれが膨らんでいって、（その人のある人生局面・状況での）‘その人らしさ’の‘拠点’となり、（場合によっては）‘核’となっていく過程・事情などを想定することができるはずで、ぼくとしては、そうした点を主題的に検討することに関心があるということについては先に注の形で触れた通りです。

この点を踏まえてここでは、〈体験効果〉論を先に推し進めていくための導入として次のような形で3種類の‘体験効果’を区別しておきます。

第1は、‘体験効果1’です。これは、短期的には強烈な印象を残しはするが、その後は残っていないもの。このタイプは、ここでは扱いません。第2は、‘体験効果2’です。これは、対象者の‘拠点萌芽’となるものです。そして第3は、‘体験効果3’で、こちらは、‘核萌芽’となるものです。ぼくの研究上の主要な関心が、‘体験効果2’と‘体験効果3’に向けられていること

---

<sup>8</sup> この体験群3を含めて、ぼくが展開している‘生活体験の分節化’論については、『事例分析への挑戦』（2000）でかなりの詳しさを展開・説明しているので、そちらの該当箇所（pp.56-65）を参照されたい。

は言うまでもありません。

### ・3 方法上の基本原則とその精緻化の見通し

ここでは、先ず〔い〕でぼくが実際に身につけ実践している分析の仕方の方法上の特徴を浮き彫りにするために、ぼくの分析の仕方の特徴づけているという自覚を持っている‘方法上の基本原則’である〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線とその含意に触れ、次に〔ろ〕でこの路線の精緻化絡みでの見通しを述べておくことにします。

#### 〔い〕 〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線とその含意

〔1. はじめに〕で述べておいたように、ぼく自身が展開したいと考えているのは〈個人状況（X篇）〉論であり、したがって、ぼくにとっての具体的な研究対象は〈個人状況〉ということになります。この研究対象の特性を視野に入れた形での、より具体的な議論の仕方については、後に〔・4 〈個人状況〉論の各論的展開のイメージの定着に向けて〕のセクションで言及することにして、ここでは、ぼく自身が自分の研究対象として設定している〈個人状況（X篇）〉だけではなく、それ以外の他の研究対象を相手にした場合にも一般的に妥当すると考えている方法上の基本原則に触れておくことにします。

ぼくが提起したい研究対象への接近の仕方の基本線は〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線です<sup>9</sup>。この路線は、データ分析の手法としては、より一般的な展開力があると考えているものです。研究対象や事例、具体的なデータなどとの向き合い方としてこの路線で分析を進めていくことは自分には基本的に合っており、心理的に言っても非常に‘自然なもの’と実感しているという事情から、ぼくはこの路線を個人的に気に入っているのですが、単にそうした、ぼくの主観的な好みからだけではなく、方法上の基本原則としてそれなりに根拠のある内実をもっているので、この路線は、より広く活用することができるはずである、というのがぼくの基本的見解です。以下、この路線について説明をしていくことにしましょう。

〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線というのは、見られるように‘ボトム・アップ’の契機と‘+ $\alpha$ ’の契機とから成り立っています。

‘ボトム・アップ’というのは、基本的には帰納法的発想での対象把握のことですが、ぼくとしては、そうした対象把握に見られる基本的な特徴、つまり、言わば‘下からの積み上げ’方式での関連データ・関連素材とのつきあい方のことを、ここでは念頭に置いています。

他方、‘+ $\alpha$ ’とは、そうした作業を持続的に行なっている際に生起することのある‘ある種の閃き’的契機に着目しようというものです。どういうことかと言えば、そうした‘下からの積み上げ’方式での関連データ・関連素材とのつきあいの作業を持続して遂行しくことには分析者の認識

---

<sup>9</sup> 水野〔2011a : pp.100-101〕、並びに後述の注19をも参照のこと。

の仕方を刺激する効果が秘められているとぼくは考えていて、その点を意識的・自覚的に活用してこようとしているのです。より厳密に言えば、とりわけ、‘積み上げ’方式でのデータ・素材とのつきあいの作業を、素材側の論理に可能な限り即し寄り添う基本姿勢で続けていく<sup>10</sup>場合には、その蓄積効果が創出してくるありうる帰結として分析者・研究者の側の認識の仕方への‘閃き’的影響が生起してくることがあって<sup>11</sup>、対象把握との関連で見られるこの‘認識の飛躍’を生み出す契機のことを‘+ $\alpha$ ’と名づけているわけです。

要するに、〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉とは、〈‘積み上げ’方式でのデータ・素材とのつきあいの作業とその持続と蓄積（これが‘ボトム・アップ’の契機です）と、その過程で生起してくることのある‘認識の飛躍’を生み出すもの（こちらが‘+ $\alpha$ ’の契機となります）の自覚的活用〉のことを指しているのです。

この〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線の一つの具体的分析手法であり、主要には『事例分析への挑戦』以降、ぼくが事例分析・解釈を推し進めていく際の基本的な方法として提起しているものに事例媒介的アプローチ（Case Mediated Approach。別名‘CM法’）があります。

#### 〔ろ〕 〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線の精緻化

ぼくは、この路線の精緻化に必要なものとしては、大きく言って次の3つの側面があると考えています。第1側面と第2側面は、実際の分析作業に関わるものであり、第3側面は、そうした分析作業を正当化する理屈に関わるものです。

質的データ分析を実際にどうやっていくのか——これは具体的な素材やテキスト、あるいは事例群を前にした時、分析者がすぐに直面せざるをえない切実な問いと言っていいでしょう。この問いにどう答えるか。ぼくは大きくは次の2つの水準で答える必要があると考えています。

1つは、具体的な素材やテキストを相手にして、それらを実際に‘料理=分析’する時に問題になる水準での答で、これが精緻化の第1側面に当たります。この側面については、その基本イメージはすでに出来上がっていて、2000年度以降の大学院の授業でも〈質的データの分析〉に特化した形でのワークショップ的な実践的講義を行なっています<sup>12</sup>。

---

<sup>10</sup> これをぼくは、〈なぞり、なぞり返す (trace and retrace)〉と呼ぶことにしています。

<sup>11</sup> この‘閃き’的影響の生起を促進する仕掛けを〈アイディアの風船飛ばし〉と呼んでいます。

<sup>12</sup> ここでは、読者に大学院での授業のイメージを伝える狙いから、次の2点に触れておきます。

1つは‘授業の進め方’についての説明です。これは、例年、大学院授業の1回目配布している受講者用連絡メモの中に書き込んでいるもので、その概略を【 】で括って示しておきます。

【授業の進め方：

+1 授業内では、基本的に〈講義〉と〈フィードバック〉と〈実際の訓練〉の3つでやっていきます；

+2a 〈講義〉 = 基本的には‘質的分析についての理屈’を中心にしたぼくの‘お話’ですね。〈講義〉を聞きながら疑問が出てきた時は、その場で積極的に質問・疑問などを投げかけてもらえると助かります；

+2b 〈フィードバック〉 = 受講者の課題・感想などの紹介と、ほくの側からのミニ・コメントからなる‘キャッチボール’のことです。例年の経験からすると、(質的分析ということに対する)受講生の皆さんの理解や認識の深まりを促進する上では非常に大切な‘やりとり’と言っていいものです；

+2c 〈実際の訓練〉(その1；前半を中心にしてほぼ毎回) = (こちらが準備するミニ・テキストや素材群を相手にして、授業内で) 受講者が実際にやってみる作業です。ワークショップ的性格の強いこの訓練を繰り返すことを通して、事例媒介的アプローチ (= Case-Mediated Approach。以下、‘CM法’ と略記) の基本的なスキルに慣れてもらうことと、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach。以下、‘GT法’ と略記) についての知的理解を深めてもらうつもりでいます；

+2d 〈実際の訓練〉(その2；後半) = 〈データ分析結果中間報告〉 と 〈データ分析結果最終報告〉 の作成作業のことです。受講者自身が手持ちの素材群を相手にしながら実際に‘質的分析’を試み、その成果(の一部)を‘データ分析結果報告’という形で文章化してもらいます。<+2a>から<+2c>までの作業につきあいながら、受講者本人が‘吸収’してきたことを実際に定着させてみるのがここでの狙いです。】；

もう一つは、例年掲げている授業目標です。こちらも、【 】で括っておくことにします。

#### 【2a 授業目標 (概略版)：

《目標1》 = 質的データ分析をめぐる 基本的問題点の認識・思索の深化：

《目標2》 = 質的データ 分析法の習得：

《目標2a》 = 質的データ分析のための 基本的ポイントの把握：

《目標2b》 = CM法とGT法の理解；

《目標2c》 = ‘使える技法群’のマスター (=習得)；

#### 2b 授業目標 (詳細版)：

授業の目標は大きくは次の2つ：

- (1) 《目標1》 = 質的データ分析をめぐる 基本的問題点の認識・思索の深化： グレー・ゾーンに属する素材群・データ群を対象にしない、という質的データ分析が 構造的に抱え込まざるをえない (=直面せざるをえない) 問題群について思索を深めること。 中心的課題は、《〈主観性・客観性・共同主観性〉をめぐる諸問題の検討》；
- (2) 《目標2》 = 質的データ分析法の習得： 質的データ分析法の習得に向けて、知的理解と実践的理解を深める こと；

《目標2》をさらに細かく言えば、《目標2a》《目標2b》《目標2c》の3つ：

《目標2a》 = 質的データ分析のための 基本的ポイントの把握：

\*1 基本的ポイント (その1)： 質的データ分析の〈内容〉と〈焦点〉についての理解；

〈内容〉：基本的には、素材群・データ群を色々検討する作業全体のこと。より具体的には、素材群・データ群を相手にしながら色々なアイディアを出してきたり、素材群・データ群・アイディア群に見通しを与えたり、それらを腑分け・絞り込み・圧縮・整理等などをする作業の総称；

〈焦点〉： 質的データ分析を実際にやっていく際の‘目玉’とでも言えるもの。

《実際はどうやっていくのか?》という疑問に対しては、

・1a その大きな流れ (=基本線；主要な分析プロセス・ステップ)を示すという水準での答え (基本線は、着目する観点との関連で複数設定することが可能) と、

・1b 具体的な分析の際に(繰り返し)用いることになるはずの技法群 (別名、‘使える技法群’)を示していくという水準での答えがある；

この水準で大切なことは、目の前にある具体的な素材やテキスト、事例を実際に分析できるかどうか、ということです。つまり、解明や解釈、分析を待っている個別具体的な素材やテキストがあ

- \*2 **基本的ポイント（その2）**：分析の仕方の基本線の認識・理解；ここでは次の2タイプに注目する；  
タイプA＝分析作業の形式的な3局面：《〈立ち上げ〉→〈展開〉→〈統合〉》の3局面；  
タイプB＝名前づけ（naming）との関連での3局面：

《〈pre-naming→naming→post-naming〉+αの整理枠組》；

- \*3 **基本的ポイント（その3）**：質的データ分析のための〈基本原則〉と〈留意点〉の理解；

・1 〈基本原則〉は、次の5つ（まだ他にもありうるので、‘基本原則’とのみ言って、‘5つの基本原則’とは言わない）。

原則1：‘3分節化’の原則；

原則2：‘発想刺激’の原則；

原則3：‘アイディア先出し’の原則；別名、〈モグラとモグラ叩き〉に関する原則とも言う（モグラとは‘アイディア候補’、モグラ叩きとは‘アイディア候補批判’のこと）；

原則4：‘すぐメモ’の原則；

原則5：‘動員’原則と‘すり合わせ’の原則；

・2 〈留意点〉は、次の3つ。

留意点1：A局面とP局面との区別の重要性；前提に〈ICAP〉トレーニングの発想あり；

留意点2：‘3重のチェック’（＝意味チェックと意義チェックと素材チェック、の3つ）；

留意点3：‘メイン作業（main work）とサイド作業（side work）との同時進行’が基本という発想・認識；

《**目標2b**》＝CM法とGT法の理解；質的データ分析のための2つのリソースであるCM法とGT法、並びにその論理を知的に理解すること；

\*1 **CM法的発想への入門**：アイディア産出、素材チェックと素材のなぞり、データ整理の発想などについての理解を含む；

\*2 **GT法的発想への入門**：コード化の発想、オープン・コード化の訓練の意味、〈コード化枠組〉の発想についての理解などを含む；

《**目標2c**》＝‘使える技法群’のマスター（＝習得）；

\*1 ‘使える技法群’ **ミニマム**：次の3つ；

①《アイディアの風船飛ばし》：ターゲット素材などに刺激されて思いついたものを思いつくままにボンボン出してくること；

②《なぞりとなぞり返し》：‘無私精神’で、可能な限りターゲット素材に寄り添うことを通して、対象素材側のメッセージ・論理・特徴などの析出に努めること。対象素材の主要な特徴に関して‘**目鼻をつける**’ことが狙い；

③**簡易整理法**：素材群、データ群、アイディア候補などを（分析者本人の責任で）**簡単に整理**すること；

\*2 **プラスαの‘使える技法群’**：

④《リスト・アップ（X）》：ターゲット素材などのX（例：特徴）をあげてくる；

⑤《揺さぶりをかける》：言葉などへの思い入れ・思い込みの相対化；

⑥《着目点（候補）の技法》：素材分析・検討のための着目点（候補）を見つけ出し実際に分析作業をやっていくこと；

⑦**構造化の技法**：ここではコード化枠組等の紹介と活用】；

るのであって、それらと向き合った時に、分析者本人に突きつけられてくる分析上の課題——日常的な分析作業場面での課題——に何はともあれ‘応えていける’という意味で、言わば‘その日暮らし’水準での分析的な対応ができるかどうか、が問われているのです。というのも、どういう理屈をこねてもいいのですが、目の前に登場してくる具体的素材や事例を‘分析=料理’できない限りどうしようもないからです。ぼくの場合、この水準での手法としては、〈なぞり・なぞり返し〉、〈アイディアの風船飛ばし〉、〈簡易整理法〉の3つを常時活用することにしていきます<sup>13</sup>。これらは具体的素材群を相手にして様々な分析作業局面で繰り返し用いることができる強力な技法群なので、ぼくはこれらを《‘使える技法群ミニマム’の3点セット》と呼んでいます。

質的データ分析を実際にどうやっていくのかという先に挙げた疑問に対する答え方の二つ目は、データ分析をしていく際の大きな流れ(=基本線)を示すという水準でのもので、これが精緻化の第2側面です。どういう主要な分析プロセス、分析ステップを踏んでいけば、分析がその成果を出すことができるのか、という点の見通しを提示すること、それがここでは大切なポイントです。データ分析の基本線は、着目する観点との関連で複数設定することが可能ですが、ここでは、その例示として、《立ち上げ→展開→統合》という分析作業の形式的3局面の発想と《pre-naming→naming→post-naming》+ $\alpha$ の整理枠組を基本とする名前づけ(naming)との関連での3局面の発想の2つを挙げておきましょう。実際の分析を進めていく際には、これらの基本線に関するイメージを持っており、しかも、その各々の分析局面で具体的にどういう分析作業をすればいいのか<sup>14</sup>、という点について見通しが立ってさえすれば、大雑把ではありますが何とかやっていきますから、ぼくなりやり方に関して言えばすでに確立しているということが言えます。後は、さらに使えるような理屈が出てくれば、追加的に採用すればいいという立場です。

精緻化の第3側面は(この路線の)理論的展開力の発揮・正当化・補強などを示唆してくれる理屈群に関わるものです。

この理屈群には、大きく2種類があると言っていいでしょう。一つは、(後に[・4 ‘個人状況’論の各論的展開のイメージの定着に向けて]の[は]のセクションで説明することになる用語を使って言えば)〈事例の提示〉を通しての〈理屈の提示〉とでも言えるもので、個別の事例分析

---

<sup>13</sup> 〈なぞり・なぞり返し〉と〈アイディアの風船飛ばし〉については、水野[1999]の冒頭あたり(pp.66-69)で、ある程度の詳しさと触れています(ただし、この論文においては、技法としての〈アイディアの風船飛ばし〉という用語自体への言及はしていないので、注意してください。そこでは、この技法を用いてなされる2番目の分析作業として、《生み出す》の説明がなされているのですから)。また、水野[2005]は、チャールズ・パースの‘abduction’の論理に言及する形で〈アイディアの風船飛ばし〉の正当化の議論を行なったものです。

〈簡易整理法〉については、『事例分析への挑戦』の付論1の前半を占める「A」《変則KJ法》(もしくは《簡易整理法》)のやり方についてのセクション(pp.335-343)で、その具体的なやり方の説明をしていますので、そちらを参照してください。

<sup>14</sup> ここで動員・活用されてくるのが、上記の《‘使える技法群ミニマム’の3点セット》です。

を積み重ねる中から紡ぎ出してくる方向での理屈群で、これについては、CM法の活用をやって事例とつきあっていけば基本的に達成できる、というのがぼくの判断です。もう一つは、〈理屈の提示〉を通しての〈事例の提示〉への貢献で、こちらは、〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線で言うところの‘+ $\alpha$ ’の契機の豊富化に関わるものです。

〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線の中の‘+ $\alpha$ ’というのは、すぐ上で述べたように認識上の飛躍が入り込んでくる局面なのですが、この局面でのアイデアを刺激したり補強したりする理屈としては、〈‘使える理論’媒介的（Usable-Theory-Mediated [UTM]）アプローチ〉の活用というアイデアが使えるのではないかとぼくは考えています。

‘使える理論’というのは、経験的現象を説明する際に動員してることができる理論のことでありますが、それが‘理論’である、という点に着目すれば、トップ・ダウン的性格を持った理屈とみなすことができるはずで、そしてトップ・ダウン的ということは、演繹的推論を作動できるということの意味をしています。演繹的推論においては、ある前提を置くことをした後は、その前提から、論理必然的に個別の命題群や結論を導き出してくることができるわけですから、‘使える理論’に見られる前提的発想を採用すると、その発想の論理必然的帰結として、（‘言わば‘数珠つなぎ’の仕掛け・論理としての）理論的展開力’を持った議論群という‘おまけ’がついてくることになり、ぼくが興味を持っている事例絡みの現象把握のためのモデル構築の際に、それらの前提的発想が現象把握の鍵になる‘戦略的洞察（strategic insight）’への示唆・ヒントを与えてくれること——これが‘使える理論’媒介的という場合の‘媒介’に当たります——が期待できることになるはずなのです。〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線の‘+ $\alpha$ ’という契機には理論的展開力の発揮が期待されているわけですが、そうした期待を実現していく際の媒介としてトップ・ダウン的性格を持った様々な理屈、つまり‘使える理論’群を活用しようということで、これを〈トップ・ダウン+ $\beta$ 〉路線と呼んでいます。

#### ・4 〈個人状況〉論の各論的展開のイメージの定着に向けて

〈心理；アイデンティティ；実存〉の3点セットからなる、ある個人の置かれた状況——形式的に言えば、これをぼくは〈個人状況〉と呼んでいます。ここでは、〈個人状況〉論の各論的展開のイメージの定着を図る狙いから、〔い〕で〈個人状況〉の定義とその含意について説明し、次に〔ろ〕で〈個人状況（X篇）〉論の意味と例示を行なう形で各論的展開イメージの概略を提示します。そして〔は〕で〈個人状況（X篇）〉論の成果様式として提示したいことについて触れ、〔に〕で、〈個人状況（X篇）〉論展開の際の有力な着目点として位置づけている〈個人的に重要な状況（Personally Significant Situation）〉論と〈Personal Formation（特定の個人がその人らしくなっていくプロセス）〉論の基本的発想やその具体的展開のための関連枠組みの一端を紹介します。そして最後に〔ほ〕で、（分析焦点としての〈個人状況〉の主題化を可能にしてくれている前提的理屈として位置づけている）〈ターゲット現象〉論の議論の焦点に触れておくことにします。

### 〔い〕 〈個人状況〉の定義とその含意

ぼくが言う〈個人状況〉とは、ある特定の個人——‘その人’という言い方をすることもあります——における〈心理；アイデンティティ；実存〉の3種類の状況の複合からなるものです。つまり、研究対象として焦点化されるのが、‘心理状況’、‘アイデンティティ状況’、‘実存状況’の各々かそれらの複合状態だ、ということです。

まず‘心理状況’というのは、心理次元で日常的に出くわしている事象、つまり、思考、感情、意思決定、記憶や五感に訴える体験、いわゆる‘知・情・意’などを含めて、心理学が得意としているテーマ領域上の事象のことで、ぼくたちが意識的に、もしくは事実上、日々の生活の中で経験しているものです。

次に、ある特定の個人において、‘自分とはどういう存在なのか’とか‘自分とは誰なのか’もしくは‘自分とは何者なのか’といったことが主題化されてくる場合——つまり、先に〔・2 なぜ〈個人状況〉論なのか〕で〈‘その人らしさ’の核〉論という形で論じようとしていた主題群が関わってくる場合——、これをその人の‘アイデンティティ状況’と呼びます。

最後に‘実存状況’とは、ある特定の個人が直面する‘肉体的な生死’そのもの、それから‘精神的レベルでの生死’、これらの両睨みをして設定しているものです。

これら3者の中で言えば一番広い網のかけ方をしているのが心理一般を対象としている‘心理状況’に当たるわけですが、この‘心理状況’はそれ自体として独立に研究することができる一方で、ある個人において‘アイデンティティ状況’が問題になる場合にも、はたまた‘実存状況’がクローズアップされる場合にも、その作動を想定・観察することができるものです。他方、‘アイデンティティ状況’と‘実存状況’とは焦点化される主題群が違うだけで、ある個人にとっての重要性という観点からは、どちらも非常に大切な位置を占めており、後に提示する用語を使って言えば、両状況とも、——さらに言えば、‘アイデンティティ状況’と‘実存状況’とが重なる場合にはとりわけ——‘個人的に重要な状況’に属すると言っていいでしょう。

またこれら3者を、‘前景・後景’関係という観点から見ると、次のようになります。‘心理状況’、‘アイデンティティ状況’、‘実存状況’は、各々、そのどれか一つの状況に焦点化する形で個人状況を主題化することが可能なわけですが、その場合は、焦点化された契機が‘前景’となりそれ以外の契機は‘後景’に退く、ということになります。例えば、‘心理状況’を中心的に論じようとする場合には、‘心理’の契機が前景で、‘アイデンティティ’と‘実存’というそれ以外の契機が後景もしくは背景に控えている、という具合に、です。

なぜわざわざ〈個人状況〉と言っているのか、と言えば、ここでは‘集団状況’‘群集状況’‘社会状況’‘組織状況’等などとの対比で〈個人状況〉を設定している、つまり、分析者であるぼくの側の主要な着目視点＝分析対象の中心・焦点＝研究主題の中心・焦点として設定したいのが〈個人状況〉であるということです。

### 〔ろ〕 〈個人状況（X篇）〉論の意味と例示

これまで断りなしに〈個人状況（X篇）〉論という書き方をしてきました。ここで、その意味について簡単に説明をしておくことにします。これは、実は〈個人状況〉論の各論的展開のための定式化を行なったものなのです。つまり、そこで‘X篇’とあるところの‘X’には、〈個人状況〉論の一環として、ぼくが個別具体的な研究の形で各論的に展開していきたいテーマを入れ込んでいこう、と考えていて、例えばX=‘人生の構図’と置いた場合には、研究対象のテーマ上の焦点として、ある特定の個人に見られる‘人生の構図’に狙いを定めた上で、このテーマに関わる限りでその対象者の〈個人状況〉の諸特徴を炙り出したり析出したりしてくる——そうした意味で〈個人状況（‘人生の構図’篇）〉論といった形での議論をしていく——ということになるのです。

‘人生の構図’以外にも、このXのところには色々なテーマを入れ込むことができるのですが——と言いますか、そうしたテーマ選択の‘自由さ’を保証しておきたいという狙いから、‘X篇’という定式化を意識的に行なっている、と言った方がより正確ですが——、ぼくなりある程度それなりの準備ができていたり、やってみると面白いかもしれないと考えているテーマをランダムに挙げてみますと、【人生の‘点と線’；個人的に重要な状況；Personal Formation＝‘その人がその人になっていくプロセス’〔シグムント・フロイトの場合〕；Personal Formation〔エリクソンの場合〕；Personal Formation〔アンナ・フロイトの場合〕；Personal Formation〔自分史テキストを対象にして〕；Personal Formation 論一般；‘その人らしい発想’の生成；フロイトの夢世界；〈マズローの Journal〉論の検討；（Happening 契機に焦点化した形での、その典型としての）‘原爆体験記’；ホームレス現象とその枠組み；基本的解釈・分析枠組みの検討；方法論的諸問題】等々といった具合になります。

### 〔は〕 〈個人状況（X篇）〉論ではどういうタイプの成果を出していきたいのか

#### 〔は1〕 〈事例の提示〉と〈理屈の提示〉

このように〈個人状況（X篇）〉論という形で取り上げたいテーマ群は沢山あるわけですが、ぼくはそれらを大きく言って2つの形でやっていくつもりでいます。一つは、〈事例の提示〉、もう一つは〈理屈の提示〉です。

〈事例の提示〉というのは、より正確に言えば〈個人状況（X篇）〉を例示もしくは体現している個別具体的な事例の分析結果の提示のことです。経験的現象——ぼくの場合には〈個人状況（X篇）〉に属する現象、ということになりますが——について議論していく際に何が大切か、という具合に問うたとすると、論者によって色々な見解や理屈が出されるでしょうが、ぼくの場合、その見解や理屈が説得力を持つかどうかを占う試金石は、問題の経験的現象に関連があるか属する具体的な事例を相手にして、これを説得力のあるモードで実際に分析・解釈できること、言わば‘論より証拠’を見せてくれることだ、という具合に考えています。事例の分析もしくは解釈次第で、自分が提起する見解や理屈の成果を十分な説得力を持って提示できることが何より重要なことではないか、ということです。こういう立場に立っているので、〈事例の提示〉は非常に重要な位置を

占めることになるわけです。

他方、先に〈理屈の提示〉と言った点をより詳しく言えば、〈〈個人状況（X篇）〉論の展開や精緻化に貢献する可能性のある重要な議論・観点・分析/解釈枠組み絡みでの様々な理屈の提示〉となります。こちらは‘論より証拠’で言うところの‘論’に当たるわけですが、ここで言う‘論’つまり‘理屈’とは、〈事例の提示〉を媒介・促進・補強・正当化してくれるはずの議論群のことです。

こうしてぼくとしては、〈個人状況（X篇）〉論の視座そのものの提起と展開・精緻化を具体的に遂行していくためには、上で説明したような意味での〈事例の提示〉と〈理屈の提示〉の両方をやっていくことが必要であると考えているのです。

ここで事例分析を通しての〈個人状況（X篇）〉論展開のための作業の基本イメージに触れておけば、〈個人状況（X篇）〉論を深化・精緻化させていくという観点からの事例の含意（implications）を明示すると共に、それらの含意に関連した理論的諸問題を検討していく形で、言わば‘らせん状’的に議論を展開していくという具合に表現することができます。つまり、【〈個人状況（X篇）〉論への暫定的視座（その1）の提示→事例の提示→その含意の（再）確認・提示→関連する理屈・理論の批判的検討→（先の）含意の精緻化and/or相対化→（以上の検討を踏まえて）〈個人状況（X篇）〉論への暫定的視座（その2）の提示→別の事例の提示→…】という具合に、です。

## 〔は2〕 現時点での見通しについて

ここで両者について現時点においてどのような見通しを持っているかという点に触れておきましょう。

まず〈事例の提示〉については、その見通しは基本的に立っているとよく、後は、具体的な事例分析を積み重ねていって、順次その成果を出していくだけです。なぜそう考えるのかと言えば、そうした見通しを保証するものとして、事例媒介的アプローチを体現した具体的手法群、それから‘process tracing’の基本発想と具体的手法を持っているからで、これら二つの手法を活用しさえすれば、どのような事例についても分析や解釈が基本的に可能だと考えているからです。

他方、〈理屈の提示〉、つまり〈個人状況（X篇）〉論の提起・展開・精緻化の仕方やそれらの議論に関連した事例分析のための視点や枠組み絡みのさまざまな正当化の議論群については、見通しの立ち方の度合の違いによって大きく3つの部類を区別することができます。

まず第1は、基本的に見通しが立っているもので、ぼくの分析方法上の基本原則として提起している〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線についてのぼく自身の理屈・議論がそれにあたります。

第2は、本人的には基本的な論点については見通しが立っているつもりでいるもので、〈ターゲット現象〉論（後述〔ほ〕を参照のこと）の分野での議論です。それらの論点の重要性を示唆するためにも、何人かの論者の議論——ここで考えているのは、S・クラカウアーの歴史特質論、M・ポランニーの暗黙知論、R・マートンの‘serendipity’論の3つ——を参考にしながら、その各々について、個別論文の形での紹介と検討が必要だと考えているものです。

第3は、見通しが立っているというにはほど遠いもので、その多くは、〈個人状況（X篇）〉論のうち、ぼくが〈Personal Formation〉論（後述参照）と呼んでいるテーマ領域での議論の精緻化の仕方に対して様々な示唆を与えてくれるかもしれない論客や論点に関連したものです。

### 〔に〕 ‘個人状況’論の各論レベルでの展開に向けて——〈個人的に重要な状況（Personally Significant Situation）〉論と〈Personal Formation〉論——

先に〔ろ〕では〈個人状況〉論は色々な議論展開が可能だということを示しておきたかったので、〈個人状況（X篇）〉論の中のXのところにランダムに色々なテーマ群を入れ込む形でその例示をしておきました。また、すぐ前の〔は〕では〈事例の提示〉と〈理屈の提示〉について説明を加える形で〈個人状況（X篇）〉論の展開モードについても確認しておきました。

ここでは〈個人状況〉論の展開という際に各論レベルでぼくがとりわけ取り組んでいきたいと考えているテーマを二つ挙げておきたいと思います。1つは〈個人的に重要な状況（Personally Significant Situation）〉論です（以下、本文の中では場合によってPSS論と略記）。これは、ミクロな生活場面での‘個人状況’の具体相に迫っていくことを可能にしてくれるはずの解釈枠組みの基本的なところに関してある程度見通しが立っていると考えているものです。もう一つは〈Personal Formation（=ある特定の人がある人になっていくプロセス）〉論で、こちらは、（S・フロイトやE・H・エリクソン、A・H・マスローといった心理学の分野での貢献が顕著な人物に関する）既存の伝記研究もしくは評伝研究の成果をも取り込みながら、彼ら・彼女らの‘個人状況’関連情報を動員してくる形で相当詳細な個別具体的事例の検討を行なう予定でいるものです。

以下、この各々の概要の説明をすることにしたいと思います。

#### 〔に1〕 〈個人的に重要な状況（Personally Significant Situation）〉論

〈個人状況〉とは、ある特定の個人における〈心理；アイデンティティ；実存〉の3種類の状況の複合からなるものだという点については、先に触れておきました。ここでPSSと言っているのは、ある個人の人生もしくは生活にとって（プラスかマイナスかは問わず）無視できないほどの切実さと重要性を持った状況のことです。ですから、〈個人状況〉の定義と関連づける形で言えば、すでに触れておいたように、ここで注目しようとしている〈個人的に重要な状況（Personally Significant Situation）〉というのは、ある個人の‘アイデンティティ状況’や‘実存状況’と密接な関係があるとみなすことができます。まず、ある人の‘生死’に関わる‘実存状況’はPSSとなる可能性が高いとみなしていいはずですが、他方、‘アイデンティティ状況’の方は、その人物の核になる‘自己’や‘アイデンティティ’に深刻な影響を及ぼす可能性のあるような場合を想定しているわけですから、ほとんど必然的にPSSとなるはずだ、という具合に言えるでしょう。そしてぼくがとりわけ興味を持って論じたいと思っているのが、〈個人的に重要な状況〉の生成局面に関する問題群なのです。

ここで、これらの問題群に取り組んでいく際の取っ掛かりとなるはずの枠組み（の一部）を提示

しておくとなりのようになります。

ぼくたちがその日々を送っている日常の生活場面においては、ぼくたちはどのようにしてPSSに直面しているのでしょうか。今仮にぼくたちが直面している日常の生活場面を‘当面現実’と呼ぶとすれば、この問いは次のように言い換えることができます。当面現実とは、どのようにしてPSSに変貌を遂げているのか、と。

この問いに答えるには、一方では当面現実の分節化が、他方ではPSSの分節化が必要です。

当面現実に直面している当事者本人のありよう——主要には、その行動と体験のありようです——を大きく枠づけ方向づけている構造的なものという意味で、当面現実の分節化の基本枠組みとしてぼくが考えているのは、【場 (setting) ; 関与 (involvement) ; 相互作用 (interaction) ; 関係性 (relationship)】という4つの契機です。まず‘場’というのは、行動と体験が生起する場のことです。次に‘関与’とは、行動と体験の主体である本人のその場での関わり方・行動の仕方です。‘相互作用’とは、その場における他者たちや周囲の環境的なものとの間で意識的（この場合は、第2の‘関与’の契機も入り込めますが）、もしくは事実上進行する相互的なやりとりや相互行為のことです。最後の‘関係性’とは、その場での関与主体間の具体的な関係性のことを指します。これら4つの複合的契機に目配りすることを通して、ある個人の当面現実の特徴を把握することができる、とぼくは考えています。

他方、〈個人的に重要な状況 (PSS)〉との関連でぼくが注目するのは、【体験的なもの (the experiential) ; 個人的なもの (the personal) ; 生活史的なもの (the biographical)】の3つの契機です。

ここで‘体験的なもの’と呼んでいるのは、先に〈体験効果〉論のセクションで「ある個人の生活もしくは人生において非常に大きな重みを持つことが明らかな…特権的体験群」という形で注目していたものです。

‘個人的なもの’とは、——‘体験的なもの’である特権的体験群に属するものであることを前提にした上で——当該個人に生起する特権的体験群の本人自身にとっての個人的な意味が、(分析者の観点から見て)事実上見られると判断できるか、個人的な意味についての自覚、つまり意味づけの自覚が(おぼろげながらも)本人自身に見受けられるものを指します<sup>15</sup>。その場合、時間的パースペクティブとしては、その個人的な意味づけの及ぶ射程が、瞬間的なものか一時的なものか、あるいはより持続的なものかは問いません。

---

<sup>15</sup> ここでのポイントは二つです。第1のポイントは、研究対象となる人物に見受けられる‘個人的な意味づけ’が見られるか否か、です。第2のポイントは、見られるか否かの判断を下す主体が2種類、つまり、分析者による事実上の判断と対象者自身による意識的・自覚的判断の2つです。後者の場合は、本人自身の発言(記録)を通して明示的にそれとわかることになるはずですが、他方、微妙なのは前者の方で、この場合、本人自身には‘個人的な意味づけ’を行なった自覚が見られないにもかかわらず、関連情報・状況証拠などを動員してきながらなされる分析者の側の解釈によって‘個人的な意味づけ’の存在を推測・推論するという境界のケースまでも許容する、ということになります。

最後の‘生活史的なもの’というのは、——‘個人的なもの’に属するものであることを前提にした上で——当該個人に生起する特権的体験群の本人にとっての個人的な意味づけが事実上か自覚的に見受けられるもののうち、時間的パースペクティブとしては、その個人的な意味の及ぶ射程が、通常、その人物の人生全体かある人生局面に及んでいると判断できるという特徴を持っています。

したがってPSSに直接関係するのは、‘個人的なもの’と‘生活史的なもの’の2つで、〈個人的に重要 (Personally Significant)〉ということの意味は、大きくは‘個人的なもの’との関連で重要か‘生活史的なもの’との関連で重要などちらかということになります。他方、‘体験的なもの’はそれ自体としては個人的な重要性と関係があるか否かは不明ですが、特権的体験群という特性を持っているので、PSSに事実上関係しているか関係してくる可能性が高く、またタイム・ラグを置いて後から個人的重要性を帯びてくる可能性が十分あるので、PSSとは事実上関係していると位置づけておいた方がいいのではないかと考えています。

こうして当面現実がPSSへと変貌を遂げるというのは、上に触れたような意味で【場；関与；相互作用；関係性】という諸契機をそなえた当面現実が、‘体験的なもの’になるか、‘個人的なもの’になるか、あるいは‘生活史的なもの’になるということの意味することになるのです。

## 〔に2〕 〈Personal Formation〉論

ここで〈Personal Formation〉論という言い方で考えているのは、〈ある特定の個人がその人らしくなっていくプロセス〉の検討のことです。社会学の用語に‘社会化 (socialization)’というのがあります。ぼくたち一人一人がある社会やコミュニティーの成員になっていく過程のことです<sup>16</sup>。この用語との対比で言えば、ぼくが焦点を当てたいと考えているのは、言わば‘個人化 (personalization)’のプロセスです。これを先には〈ある特定の個人がその人らしくなっていくプロセス〉と言いました。ニーチェの言葉に〈To become what one is〉というのがあるらしいのですが<sup>17</sup>、ある人が‘本人の本質になっていくこと’を指して、ここでは〈Personal Formation〉と呼ぶことにしているのです。

〈Personal Formation〉論においては、〈how one becomes what one is〉、つまり〈人はどのようにして‘その人’らしくなっていくのか〉という問いが中心的なもので、この問いのまわりに、〈どういった事情・要因が‘その人らしさ’生成を促進 (facilitating ; enabling) もしくは妨害 (blocking ; constraining) していくのか〉といった問いを設定しうるように思います。

このように、〈To become what one is〉は〈Personal Formation〉論の一番の着目点なのですが、

---

<sup>16</sup> 『岩波小辞典 社会学』(2003)には「個人が他者との相互作用を通じて、自己を発達させ、その社会(集団)に適合的な行動様式を獲得する過程.社会の観点からみれば、個人に社会(集団)の価値・規範、技能・知識などを習得させ、個人をその社会(集団)に適合的な存在にしていく過程であり、個人の観点からみれば、他者との相互作用を通して、その社会(集団)にふさわしい行為を身につけていく過程である。」(p.101)という説明で紹介されています。

<sup>17</sup> Friedman [1999 : p.46]。

そこに出てくる‘become (= <～になる> = <生成>)’の中身については注意が必要です。どうということかと言えば、この‘become’というプロセス自体は、この言い回しからは‘一本線で徐々に<what one is>になっていく’という印象を与えがちですが、しかし、<To become what one is>と言っても、そのようなプロセスのまさに渦中にある本人の視点から考えるなら、そうした印象とは違って、‘右往左往しながらジグザグで’、あるいは‘一進一退’の形で進んでいっている可能性が大きいからです。

なお、先の〔・2 なぜ<個人状況>論なのか〕のセクションでぼくなりに思い入れのある議論として《〔ろ〕<‘その人らしさ’の核>論》と《〔は〕<パーソナル・ライフ・キャリア>論》に触れておきましたが、<Personal Formation>論はそれらの議論と密接な関わりがあることはわかっていただけるのではないのでしょうか。

### 〔に3〕 分析上の基本戦略

<個人状況 (X篇)>論、とりわけ<個人的に重要な状況>論と<Personal Formation>論の二つのテーマに関わる問題群を解くために活用しようと考えている分析上の基本戦略は‘インパクト分析’と‘メカニズム分析’の二つです。

‘インパクト分析’については、すでに『事例分析への挑戦』(2000)でかなり丁寧な検討を行なっているので、その議論の詳細についてはその著作の該当箇所(p.5, p.12, pp.92-96)に譲ることにして、ここでは、そこで行なっておいた定式化を引用する形でその基本的発想を再確認しておきますと、「インパクト分析とは、分析対象とする事象の諸特徴を把握していく際の基本的一視角としてぼくが設定しているもので、形式的には、その事象のあり方に対して《何が効いているのか》という設問に対する答えを模索する試みと言うことができる。もう少し突っ込んで言えば、ここでインパクト分析という場合には、分析対象となる素材の内に見取れるか、対象素材から推論できると思われる範囲内で、因果関係などへの目配りをも含めて、分析対象となる事象のあり方に対するさまざまな形での影響や作用の諸相を可能な限りふわけし特定化してこようとする試みのことを意味している」(p.5)ということになります。この研究ノートでの議論脈絡で言えば、引用文中で‘分析対象とする事象’と言っているものは<個人状況 (X篇)>として設定されるものなのであり、そうした事象をめぐって<何が効いているのか>という観点に留意しながらさまざまな形での‘影響や作用の諸相’を特定化し析出してくることが‘インパクト分析’を行なうことなのです。

‘メカニズム分析’とは、経験的事象としてのターゲット現象に見出すことができるある種の‘規則性’、‘傾向性’、‘法則性’に注目することを通して<ターゲット現象>(もしくはその一部)に作動していると思われる‘メカニズム的なもの’を析出してこようとする分析様式のことです。ここでの一番のポイントは‘メカニズムの作動’で、上記の引用の中に‘因果関係’という表現が見られましたが、この特定化が難しい‘因果関係’というのも‘メカニズム的なもの’の中の一つ、しかも非常に有力なものと言っていいでしょう。

なお、‘メカニズム’論的発想とその理論的展開可能性を標榜しているものに、マートン社会学の系譜の現代的展開として位置づくはずの‘分析的社会学派’の諸業績があり、この学派の動向については大いに注目しています<sup>18</sup>。経験的事象の中に見られることのある‘メカニズムの作動’という事態に注目することの重要性、現象の動態的把握にあたっての重要性という認識をぼく自身が持っているからです。

それはともかく、ぼくとしては、〈個人的に重要な状況〉に関連した現象の説明に当たっては、〈先ずはインパクト分析的発想でもっての接近を基本とし、次いで場合によってはメカニズム分析的発想をも動員してくる〉というやり方、つまり〈インパクト分析が主、メカニズム分析が従〉の路線を採用することにしています。

### 〔ほ〕 〈ターゲット現象〉論——分析焦点としての〈個人状況〉の主題化を可能にしてくれている前提的理屈——

〈ターゲット現象〉とは研究者が研究上の焦点として設定する事象のことで、ぼくの場合には〈個人状況〉がそれに当たります。そして〈ターゲット現象〉への接近の仕方自体の主題化・検討を〈ターゲット現象〉論と呼んでいます。ここで考えてみたいのは、〈ターゲット現象〉としての〈個人状況〉を、どういう具合に把握していくか、把握できるか、なぜ把握できるのか、という問題群です。

すぐ上で見たように、ぼく自身は〈個人状況（X篇）〉論を多様な形で展開しようとしているわけですが、そうした議論を展開するにあたっては、論理的にその前段の議論として位置づく議論を想定することが可能ですし、そうした議論をしておくことが必要だと考えています。どういうことかと言えば、〈個人状況〉論を展開する以前に、そもそも〈個人状況〉論を展開することがなぜ可能なのかと、その前提的議論水準に降り立って、そうした議論を可能にする根拠自体を主題的に論じることができますし、またそのような議論をどのように展開しうるのか、展開すべきなのか、といった点を主題的に論じることができる、ということ。これが一つです。そしてそうしたことが可能だというだけでなく、〈個人状況〉論の特質を浮き彫りにするためにも、そうした前提的議論を主題的に論じる必要がある、ということ。これが2点目です。この前提的議論水準での‘根拠と方法’に関わる議論を、ここでは〈ターゲット現象〉論という形で提示しておこうとしているのです。つまり、〈なぜ、どのようにして（Why & How）〈個人状況〉は研究の焦点とみなすことができる〈ターゲット現象〉たりうるのか、という問題を解いておこう〉ということなのです。

より具体的な議論の予告を主要な狙いの一つとしているこの研究ノートでは議論の詳細を披露することはできませんが、〈ターゲット現象〉の把握の際に問題になってくるはずの基本的論点は、大きく言って次の2局面の議論群として考えるべきではないか、というのが、ぼくの基本的見解で

---

<sup>18</sup> さしあたり Hedström & Swedberg [1998], Hedström & Bearman [2009], Demeulenaere [2011] を参照のこと。

す。

第1局面は、分析者・研究者は〈ターゲット現象〉とどういう出会い方をするのか、〈ターゲット現象〉の特質や性質をきちんと受けとめ十全に活かす形で〈ターゲット現象〉と出会うためにはどういう出会い方をするのが望ましいのかという局面に関わる議論群で〈ターゲット現象〉把握論（パート1：〈出会い〉篇）と呼ぶことができるでしょう。

第2局面は、そうした出会いがあった後、その出会いの成果を理解し定着させる局面で、これは大きく次の2側面を持っています。一つは、〈ターゲット現象〉の性質や特質がどういったものなのかを理解するという点に関わる議論群で、これを〈ターゲット現象〉把握論（パート2a：〈理解〉篇）と呼んでおくことにします。もう一つは、〈ターゲット現象〉があるまとまりを持った‘全体（Gestalt）’として結晶化してくるという点に関わる議論群で、こちらは〈ターゲット現象〉把握論（パート2b：〈ゲシュタルト化〉篇）と呼ぶことにします。ぼくは先に〈理屈の提示〉に触れた際に〈ターゲット現象〉論の分野で注目すべき興味深い議論としてS・クラカウアーの‘歴史特質’論、M・ポランニーの‘暗黙知’論、R・マートンの‘serendipity’論の3つに触れておきましたが、それらの議論こそ、これら2局面に関わる形でぼくが批判的検討を加えようとしている主要な議論なのです。

ちなみに、この〈ターゲット現象〉論自体は、ぼくが興味関心を持っている〈個人状況〉論だけではなく、研究者が歴史的事象を言わば‘発見’的＝‘探索的’に議論展開しようとする場合には——つまり、その研究が歴史的事象に関わる‘探究的調査研究（exploratory research）’という基本性格を具えている場合には——、一般的に妥当する側面を持っているはずのものだ、という点も指摘しておきたいと思います。

## ・5 終わりに——まとめと今後の課題——

それではこの研究ノートでやってきたことについて簡単なまとめをしておきましょう。[・2 なぜ〈個人状況〉論なのか]では、人生に対する〈基本姿勢〉論、〈‘その人らしさ’の核〉論、〈個人的な人生のキャリア（personal life career）〉論、〈体験効果〉論という相互に関連し合った議論を説明することを通して、〈個人状況〉論にぼくなり込めている思い入れの一端を披露しました。[・3 方法上の基本原則とその精緻化の見通し]では、ぼくがデータ分析を実践していく際の方法上の基本原則である〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線についてその基本的なところを説明すると共に、この路線のとりわけ‘+ $\alpha$ ’の契機を豊富化し‘戦略的洞察’へのヒントを与えてくれるという意味で、この路線を補完するものとして〈トップ・ダウン+ $\beta$ 〉路線の重要性についても触れておきました。[・4 〈個人状況〉論の各論的展開のイメージの定着に向けて]では、〈個人状況〉の定義から始めて、〈個人状況（X篇）〉論という定式化の意味の説明に進み、その議論の成果としては〈事例の提示〉と〈理屈の提示〉の両方を考えていること、それから、ぼくがとりわけ力を入れて取り組んでいきたいと考えている〈個人的に重要な状況〉論と〈Personal Formation〉論絡みでの

関連枠組みについて簡単に触れました。また、〈個人状況〉論を展開していく上でその前提的議論として重要な位置を占めているという判断から、〈ターゲット現象〉論にも言及しておきました。

以上の検討を踏まえて最後に、今後の課題に触れておきたいと思います。この研究ノートで行なってきた主張との関わりでは次の三種類の課題を設定できるのではないかと考えています。

第1は、〈個人状況〉と言う場合の‘個人’のありようや存在様式、あるいは‘個人的なもの’の特質をめぐる主題群の検討です。ここでは、‘人間的なもの’や‘個人的なもの’などの意味合いや含意に関する哲学的思索を含めて、‘人間存在’の‘根源’に迫ろうとする志向を持った存在論的水準での議論をめぐる思索が求められることになるはずで、そうした‘思考実験’的な思索には‘人間存在’の‘可能性と限界’やその‘ありうる根源的特質’について思いをめぐらし内省する貴重な機会を提供してくれる側面があるので、ぼくなりには興味はあるものの、そうした議論は、いきおい具体性を欠いた抽象度の高いものになりがちで、とりわけ具体的次元での経験的諸問題に対する含意や波及効果がはっきり見渡しにくい形で展開される抽象的議論に関しては基本的に不信感を持っているぼくとしては、そうした議論にどこまでつきあっていけるか、つきあっていきたいのかについて、現時点でははっきりとした態度決定ができません。

ただ、幸いなことに、例えば、C・テイラーやH・アーレントのようなぼくなりには気にかけている哲学者もいるので、彼らの『自己の諸源泉』(Taylor [1989]) や『人間の条件』(Arendt [1958]) などの文献や、M・アーチャーやC・スミスなどの社会学者の人間存在に関わる研究 (Archer [2000] やSmith [2010]) を参考にしながら、第1の課題の検討を進めていくつもりです。

第2は、[・3 方法上の基本原則とその精緻化の見通し]のセクションでぼくが行なってきた主張や議論の妥当性如何を振り返り再検討しておくという課題です。ぼくが念頭に置いているのは、〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線の議論や、その一環としての〈トップ・ダウン+ $\beta$ 〉路線の議論のことです。この非常に重要な論点をめぐっては、ぼくの主張に関連した議論や類似した議論を展開している論客たちが実は何人もいるのですが<sup>19</sup>、[1. はじめに]の注で触れておいたように、ぼく

---

<sup>19</sup> 〈ボトム・アップ+ $\alpha$ 〉路線に関連してぼくが注目している論客たちとそのテーマ群については、——下記の〈ターゲット現象〉論絡みで検討を予定している論者たちとも一部ダブることになりますが——すでに‘2010年度国内研究員研究経過報告書’(2011年5月27日付け)という報告書の中で触れてあります。今回の研究ノートの問題関心とも響き合う内容を圧縮した形で表現しているものですし、大学への報告書という性格上、公的性格を持った文章でありながら外部に広く知られているものではないので、ここで関連する箇所を転載しておく次のようになります。

「・・・前略・・・」

② <(1)《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》での対象把握とその含意の検討>関連:

+1 関連する議論群:(今回、そのすべてに取り組んだわけではないが)この課題に関連する議論群として視野に入れ込んでおかなければならないと考えているのは、‘生活史’論、‘全体’産出論、‘ボトム・アップ+ $\alpha$ ’の論理とその含意の3つである。

昨年度、たまたまぼくが所属する生活史研究会の第109回例会（2010・06・26）で‘生活史研究の課題を考える’というテーマで口頭発表する機会に恵まれた。その時の発表レジュメ（→《〈生活史研究の課題を考える〉（概略版；A4で23枚）》）がその成果であり、このレジュメを膨らませる形で、「生活史研究への示唆を求めて——ミクロの歴史学の場合——」という紀要論文（2011、『社会志林』、第57号、第4号、pp.77-118）を執筆した。

この論文執筆の準備作業においては、‘全体’産出論に属するテーマである〈個別事例（もしくは個別事象）とそれを超えるものとの関連づけ方に関する理論的問題〉との関連で、ミクロの歴史学の成果の吸収、（このミクロの歴史学研究の一環としての）ギンズブルグ論、クラカウアー論（〈S・クラカウアー、1969=1977、『歴史 永遠のユダヤ人の鏡像』、平井正訳、せりか書房〉が中心的テキスト）の3点にわたって、ある程度の‘読み込み’作業を行なった。

+2 〈《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》とその含意の探求〉論のためのメモについて：論文草稿用の目次構成案の形ではあるが、〈《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》とその含意の探求〉論のためのメモを作成した。そのメモは【‘ボトム・アップ’の契機関連の議論群の検討；‘+ $\alpha$ ’の契機関連の議論群の検討；《トップ・ダウン+ $\beta$ 》の発想との関連での議論群の検討；《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》のありうる意味の提示】という4つの構成部分からなるものである。

そのメモの要点のうち、初めの2つの検討内容について、より詳しく述べておけば、次のようになる。

〈《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》とその含意の探求〉を進めていく際の基本方針は、大きくは次の2つである。一つは、[い] 〈《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》に関連した各々の議論群に特徴的な‘視点’や‘切り込み方’もしくは‘議論の仕方’〉の抽出・析出であり、もう一つは、[ろ] 〈議論群の例示に用いられている具体的事例（specific cases）や具体例（specific examples）〉の抽出と（ぼくの議論脈絡への）組み直し・組み込みである。

先ず[い]から。この[い]は、ぼくの観点から見て、《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》現象の何らかの側面について議論していると思われるものに着目しながら、それらの特徴についてぼくなりの把握を試みる、ということである。

[い]の作業をより具体的に言うと、[い1]‘ボトム・アップ’の契機と[い2]‘+ $\alpha$ ’の契機という二重の焦点部分の各々について検討を行なう、ということになる。

[い1] = ‘ボトム・アップ’の契機関連の議論群の検討：

まずは（どちらかと言うと）‘ボトム・アップ’の契機に着目した議論群を検討する。検討に値すると考えている議論候補としては、‘帰納’論検討（より具体的には、ホランドらの‘induction’論とWhewellの‘induction’論[とりわけ‘Idea’と‘data’との関連論]を念頭に置いている）とSimonの意味での‘ヒューリスティクス’論の検討がある。

[い2] = ‘+ $\alpha$ ’の契機関連の議論群の検討：

次いで（どちらかと言うと）‘+ $\alpha$ ’の契機に着目した議論群を検討する。この議論群に属するものとしては、【‘パターン認識（pattern recognition）’論；‘勘’論；‘直観的認識’論；‘臨界点（critical mass）’論；‘相移行（phase transition）’論】などを含めて沢山あるが、ぼくとして腰を落ち着けて取り組んでみたいと考えているのは、【ポランニーの‘暗黙知’論[とりわけ‘棲み込み（dwelling）’論]；‘serendipity’論[マートンらの議論を含む]；‘mental leaps’論；‘概念的ブレンド化（conceptual blending）’論】の4つである。

次は[ろ]である。すぐ上で【‘パターン認識’論；‘勘’論；‘直観的認識’論；‘臨界点’論；‘相移行’論】や【‘暗黙知’論；‘serendipity’論；‘mental leaps’論；‘概念的ブレンド化’論】を挙げたが、ここでは、[い]の検討の際に用いるはずのそれらの議論素材を、元の論者たちの議論の仕方とは異なる議論脈絡（要するに、ぼく自身の議論脈絡）の例示や素材として、使える可能性を追求していこう、とい

はこの研究ノートでは言わば‘一方的’に自分の主張を提示したままになっています。そうした主張をするにあたっては、本来なら、ぼくが気になっている主要な論客たちの議論と比較・対照しながら、ぼくの議論自体がどの程度の妥当性や正当性をそなえたものなのかを粘り強く検討していくのが望ましいのですが、そうした検討・確認作業をなしで済ましています。というわけで、第2の課題としてそうした点の検討を挙げておくことにします。

第3は、この研究ノートでの主張の延長線上で、ということになります。ぼく自身として今後取り組んでいきたいと考えている個別的な課題群です。それらはいくつもあるのですが、以下では、〈ターゲット現象〉論絡み、〈個人的に重要な状況〉論絡み、〈Personal Formation〉論絡みの3つのグループに属する課題群を中心にして説明します。

先ず第1のグループは〈ターゲット現象〉論絡みのもので、すでに何度か触れておいたように、

- (1) S・クラカウアーの‘歴史特質’論、
- (2) M・ポランニーの‘暗黙知’論、
- (3) R・K・マートンの‘serendipity’論

の3つです。

〈ターゲット現象〉論の展開にあたっての一つの重要なポイントで、しかもぼく自身ある程度見通しが立っていると考えているのは、〈ターゲット現象〉との出会いにまつわる問題群で、先に〈ターゲット現象〉把握論(パート1:〈出会い〉篇)と位置づけておいたものです。ここで念頭に置いているのは、〈ターゲット現象〉と出会うためにはそもそもどういった点に気をつけておかなければならないのか、ぼくたちはどのようなモードで〈ターゲット現象〉と出会っているのか、どういった出会い方がありうるのか、といった問題のことですが、こうした問題を考える上で示唆的なのが、上記の論者たちの議論なのです。各々の論者の議論の注目点に触れておけば、S・クラカウアーの‘歴史特質’論の場合には‘積極的受動性’論の視点の継承が一番重要な点です。またW・H・セウエル(Sewell [2005])の検討も関係してくるかもしれません。次に

---

うものである。(例えば、‘パターン認識’論と‘ヒューリスティクス’論とは、認知研究の分野での研究という意味では、近いが、しかし研究の焦点は明らかに異なるし、広義の‘induction’論は、‘論理展開’の筋道に関する議論という意味では、両者とは異なっている。さらに〔例示には上げていないが〕‘歴史記述’論となると、まったく別の議論をしているようにも見える。しかしながら、そこには、‘全体的な何か’の生成という問題を扱っているという点で‘同型の発想’を見て取ることができるのではないかと、というのが、ぼくの基本的な発想なのである。)《多様な例示群の収集と、それらの、違った議論脈絡への組み込み可能性の追求》——これが〔ろ〕のポイントである。

要するに、ここでの検討作業の基本線は、《相手(=ぼくが注目するところの様々な論者たち)の議論に寄り添いながら、その特徴を析出してきた上で、自分の議論の中に位置づけand/or組み込んでくる》という2段階の作業から成り立つものである。《ボトム・アップ+ $\alpha$ 》の議論との関連で言えば、‘相手の議論への寄り添い’の部分が、《ボトム・アップ》局面での作業そのもの、次の‘特徴の析出’が《+ $\alpha$ (その1)》。そして‘自分の議論への組み込み・位置づけ’が《+ $\alpha$ (その2)》と言っていざらう。・・・後略】。

M・ポランニーの‘暗黙知’論の検討に当たって俎上に載せようと考えているキー・テキストは Personal Knowledge (Polanyi [1958]) という著作です。そこで吸収しようとしている論点自体は現時点ではまだ詰め切れていないのですが、最低限、‘暗黙知’論と‘棲み込み (in-dwelling)’論絡みの成果は継承してくるつもりでいます。最後に検討を予定しているのはR・K・マートンの‘serendipity pattern’論です。ここでは、マートンが提起している3点セット (<《unanticipated, anomalous and strategic》 = 【意外性；異常性；戦略性】という3重の契機>のことです) の定式化の継承がポイントとなるはずで。

なお、<ターゲット現象>把握論 (パート2a : <理解> 篇) と <ターゲット現象>把握論 (パート2b : <ゲシュタルト化> 篇) についても論じていく必要があるはずだと考えていますし、とりわけ <ターゲット現象>把握論 (パート2b : <ゲシュタルト化> 篇) の方は相当重要な論点を内包して本格的な取り組みに値する研究対象であることは確実なのですが、当面は、<ターゲット現象>把握論 (パート1 : <出会い> 篇) の道筋を立てることに精力を注ぐつもりでいます。

第2のグループは <個人的に重要な状況>論絡みのもので、

(4) ‘点’と‘線’の観点からの一連の議論、

(5) ‘ライフ・コース’論的観点からの示唆を抽出してくるための議論、

(6) <個人的に重要な状況>把握に関連した <5つの構造的契機>絡みでの関連文献での主要な議論 (M・アーチャーの‘Agency’論, B・ライールの‘複数的人間’論, K・バークの‘動機の文法’論等) の検討・批判的継承、

(7) <個人的に重要な状況>把握に関連した <5つの構造的契機>論の展開を狙いとした議論、の4つです。

(4) で‘点’と言っているのは、人生や生活の中の重要な1場面のことであり、‘線’というのは、そうした‘点’の連なりが創り出してくる人生局面のことですが、この(4)での議論は、2015年度以降の学部授業(‘人間・社会論A’)でかなりの詳しさを展開しているものです<sup>20</sup>。‘ライフ・コ

<sup>20</sup> 参考までに、ここでは、2016年度春学期に行なった講義のアウトライン(簡略版)を【 】で括って載せておきます。

#### 【2016年度人間・社会論A

——《‘個人状況’論の展開——<社会と時代の中の人間存在>の具体相に迫る》——

講義のアウトライン(簡略版)

1. イントロ：個人状況論への導入＝‘個人状況’論の展開に向けて；
  - (1) 講義概要の説明；
  - (2) ‘個人状況’論の展開ということの意味；
  - (3) ‘個人状況’論に関わる議論系譜4つ；
  - (4) 事例の例示的紹介；
  - (5) どんな事例を使うのか；
2. 個人状況論への視座1＝どういう議論をどういう具合にやっていくのか；
  - 2.1. ‘個人状況’の把握のための枠組み；
  - 2.2. ‘process tracing’の手法の活用；

ース’論的観点の継承如何、これが（5）での検討課題です。どういうことか、たとえば、〈個人的に重要な状況〉論という発想自体、興味関心の重点が‘社会化’よりも‘個人化’の方に置かれていることを明示しているわけですが、そうした‘個人的に重要な状況’論に対して、社会学主義的傾向が強い‘ライフ・コース’論的観点が何かヒントを与えてくれるものを持っているかどうかを検討しておこう、ということです。（6）と（7）に〈5つの構造的契機〉とあるのは、【出来事（Event）；ポジション（Position）；物語（Narrative）；心（Mind）；理解（Understanding）】という5つの契機からなる枠組みのことで、細かい詰め作業をしていく過程で名称や理論的位置づけなどについて微妙な修正・変更を加える余地が残っているとは思いますが、‘個人’現象への理論的接近にあたっては自身その基本的なところについては、すでにかかなりの目途が立っているのではないかと考えている分析枠組みのことで、（6）ではその議論の精緻化を推し進めていくために注目しようと考えている論客たちとその議論を挙げてあります。また（7）ではそうした理論的検討を踏まえて、もしくはそうした検討と並行させて、この枠組み絡みでの自身理屈の提示に向けての検討を行なっていこうと考えています。

最後に第3のグループは（‘その人がその人らしくなっていく’過程を主題的に論じる）〈Personal Formation〉論絡みのもので、

- （8）〈Personal Formation〉論的観点からの個別事例の検討、
- （9）〈Personal Formation〉論展開のための媒介をしてくれる議論群の検討、
- （10）〈Personal Formation〉現象把握のための枠組みの提起・精緻化、

の3つとなります。

（8）に関しては、先に精神分析の創始者として知られているシグムント・フロイトや抜群の臨床的力量を発揮したことで有名な児童精神分析家E・H・エリクソン、なかなかバランス感覚のすぐ

---

3. ‘個人状況’論展開の際の戦略的着目点：‘点’と‘線’の発想；

3.1. 点レベルでの議論：

- （1）点への焦点化＝人生/生活体験的エピソード’論；‘風が見えた日’の事例；
- （2）点の中の線＝‘X結晶化プロセス’論；『アンダーグラウンド』論から；

3.2. 線レベルでの議論：

- （3）線としての個人状況1：‘人生局面’論（その1）：‘特権的生活体験の連鎖’論；
- （4）線としての個人状況2：‘人生局面’論（その2）：‘人生の移行局面’論；
  - （4a）『仕事漂流』の中の事例1；
  - （4b）『仕事漂流』の中の事例2；
- （5）個人史へのまなざし＝‘人生局面’論（その3）：‘エリクソンにおけるアイデンティティ形成’論；
- （6）個人史への焦点化＝‘人生の軌跡’論：
  - （6a）ホームレス現象論；
  - （6b）‘人生の構図’編の紹介；
  - （6c）‘おっかあを失ったX氏’の場合；

4. 小括＝再確認的なまとめと今後の展望：どういう議論をやってきたのか】；

れた児童精神分析家とっていいアンナ・フロイトなどの候補を挙げておきましたが、(8)をやりながら(9)や(10)についてのアイデア群を提示していこうという問題意識(先に[4.]で用いた言い回しで言えば、〈事例の提示〉を媒介にした〈理屈の提示〉という路線のことで)を持っているので、個人的には、相当詳細なデータ群を相手にした事例検討ができれば、と考えています。そうした観点からすると、長年‘寝かした’形で関連情報の蓄積を行なってきた事情を勘案すれば、S・フロイトの『夢判断』の執筆に至るまでの時期が研究対象として浮かび上がってきますし、また、父親のフロイトとの往復書簡やアンドレアス・ザロメとの交友関係の跡づけが可能な往復書簡を含めて、豊富な伝記情報が存在する点などを考慮すると、児童精神分析家として世間的認知が定着し始める以前の時期のアンナ・フロイトが、有力な事例になるかもしれない、と考えているところです。

#### 《関連文献一覧》

(著者名アルファベット順)

- Archer, Margaret S., 2000, *Being Human: The Problem of Agency*, Cambridge University Press.
- Arendt, Hannah, 1958, *The Human Condition*, The University of Chicago Press.
- Berman, Morris, 2006, *Dark Ages America*, W. W. Norton & Company.
- Burke, Kenneth, 1942 (1969), *A Grammar of Motives*, University of California Press.
- Demeulenaere, Pierre (ed.), 2011, *Analytical Sociology and Social Mechanisms*, Cambridge University Press.
- Friedman, Lawrence, J., 1999, *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*, Scribner.
- Hedström, Peter & Bearman, Peter (eds.), 2009, *The Oxford Handbook of Analytical Sociology*, Oxford University Press.
- Hedström, Peter & Swedberg, Richard (eds.), 1998, *Social Mechanisms: An Analytical Approach to Social Theory*, Cambridge University Press.
- クラカウアー, ジークフリート, 1969=1977, 『歴史 永遠のユダヤ人の肖像』, 平井正訳, せりか書房=
- Kracauer, Siegfried, 1969=1971, *Geschichte – Vor den letzten Dingen*, Suhrkamp.
- ライール, ベルナル, 1998=2013, 『複数の人間——行為のさまざまな原動力——』, 鈴木智之訳, 法政大学出版局。
- Merton, Robert K. & Barber, Elinor, 2004, *The Travels and Adventures of Serendipity*, Princeton University Press.
- 宮島喬編, 2003, 『岩波小辞典 社会学』, 岩波書店。
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」, 宮島喬編『社会学の歴史的展開』所収, サイエンス社, pp.149-208。
- 水野節夫, 1999, 「ドイツ在住のトルコ女性の変容体験——自伝的語りのインタビューへの事例媒介的アプローチ——」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第46巻, 第1号, pp.65-85。

水野節夫, 2000, 『事例分析への挑戦』, 東信堂。

水野節夫, 2005, 「GT法の分析的ポテンシャル」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第52巻, 第3号, pp.47-75。

水野節夫, 2011a, 「生活史研究への示唆を求めて——ミクロの歴史学の場合——」, 『社会志林』(法政大学社会学部紀要), 第57巻, 第4号, pp.77-118。

水野節夫, 2011b, 「2010年度国内研究員研究経過報告書」(2011年5月27日付け)。

Polanyi, Michael, 1958, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, The University of Chicago Press.

Sewell, William H., Jr., 2005, *Logics of History: Social Theory and Social Transformation*, The University of Chicago Press.

Smith, Christian, 2010, *What Is a Person?: Rethinking Humanity, Social life, and the Moral Good from the Person Up*, The University of Chicago Press.

Taylor, Charles, 1989, *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Harvard University Press.